

山林の寺院造営

加賀の立国から一八年後の承和八年（八四一）、勝興寺を加賀の国分寺に定め、僧一〇人を越前の国分寺から分けていた。これは既存の私寺を国分寺へ転用したもので、その所在地は古府町の十九堂山遺跡に比定する説が有力である。またこの頃、国府の南方に位置

する丘陵では、山林に境内を構えた寺院が新たに造営されている。

八幡町の浄水寺は、清水山の斜面で古代から中世に営まれた寺院である。九世紀の後半頃には寺名を「浄水寺」と記し、僧侶が居住した「南房・仁房」の僧坊に加え



寺院名を書いた土器(浄水寺跡出土、石川県埋蔵文化財センター所蔵)「キヨミズデラ」の遺跡からは「浄水寺」に加えて、僧侶が居住した「南房」「仁房」などの名前を墨で書いた土器が多数出土した。



唐代の水差し(浄水寺跡出土、石川県埋蔵文化財センター所蔵) 中国の長沙窯(河南省)で焼かれた高さ20.4cmの陶器で、白磁や青磁の碗皿と共に寺院の仏具として使用されたとみられる。

て、「中院・前院・倉」などの施設が置かれていた。

境内には神聖視された湧き水があり、金属や木製の仏具、希少な唐代の陶器所有から、加賀の国府に関係した有力者の保護を受けた僧侶が、静寂な山間で仏の教えを学び、仏典の書写と講究の修行をしていたとみられる。さらに吉祥や招福を意味する「富集・吉来」の出土文字からすると、現世の利益を



浄水寺跡の仏堂(石川県埋蔵文化財センター提供) 八幡町の「清水寺の池」では雨乞いの信仰が伝わり、池の前からは、平安時代後期に創建された浄水寺の仏堂が発見された。池は人工のもので、仏堂の移転後も寺の存在を伝えた。

目的に祈禱も実施したとみられる。

十一世紀前半には、「清水寺の池」と伝承された湧き水の前面に大型建物を建て境内を整備している。建物構造は

懸造かけづくりの構造で、観音を主尊とした仏

堂として鎌倉時代も存続したようだ。

能美郡の山林世界をみると、八世紀後半には松谷廃寺の小堂が建ち、九世

紀前半に八里向山B遺跡で神社とも考えられる一堂二宇の施設が設営されている。九世紀後半には、里川E遺跡で仏堂と二宇の附属建物が造営され、これと前後する時期には、各地の山林で寺庵や仏舎の建設がみられる。

加賀地方の仏教は、白鳳期に金堂や塔を配置した寺院の造営で始まり、奈良〜平安時代と仏徒の活動は山野に展開している。そのような環境のもと、浄水寺に拠点を置いた仏徒は、国分寺などで教学を修め、静寂な山間で修行を積んでいた僧侶であった。(垣内光次郎)



丘陵上の宗教施設(八里向山B遺跡、小松市埋蔵文化財センター提供) 平安前期、鍋谷川の平地を望む場所に寺院とは異なる3棟の建物が造営された。一堂二宇の建物は「社殿、附属舎、宮倉」とも考えられている。